

第IV部門 形態・素材・色彩から見る街路景観の変遷

大阪工業大学工学部 学生員 ○中上 竜一
 大阪工業大学工学部 大部 美菜
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞
 大阪工業大学工学部 正会員 田中 一成

1. はじめに

都市とは、個々の住居が集まり集落や街並みとなり、それらが連担することで形成されている。都市や街並みを見ることで、住んでいる人々の文化やその地域の歴史を知ることができる。江戸時代では、街道を中心に集落や街並みが形成されてきた。現代では、昔のような瓦屋根や白黒の色彩、高さの統一された建造物といった形態・素材・色彩といった面で連続性のある日本的な街路景観が失われつつある。また、年々人々の価値観も多様化し、個々の感性を重要視する傾向より日本らしい伝統的な建造物も数を減らしている。

「日本らしさ」を伝えていくには、まず視覚的に身近に感じられる「街路」が必要であると考えた。街路景観を構成する要素の中で視覚的に影響が大きい形態、素材、色彩に重点を置いて、日本の文化や歴史を活かした調和した街並みについて考える。

2. 研究の目的・方法

現代の街並みは、人工的な素材や多様な形態の建造物、それらに付加される多様な色彩によって満ち溢れている。したがって、伝統的な建造物との調和を図る街並みを形成するためには形態・素材・色彩が考慮すべき重要な属性として考えられる。とくに「歴史的環境保全整備計画」などの歴史的な建造物の保全だけでなく、彩度・明度に規制をかけた色彩による取り組みなども増えてきている。そこで、街路を形成する形態・素材・色彩の観点から伝統的な建造物とその周辺との調和を考えていくことにした。

具体的な方法としては、形態・素材・色彩の変化によって、街路景観がどのように移り変わってきたのかを把握するため街路景観の変遷を追っている。また、現状把握のため、現地調査による屋根形状などの形態と木材・漆喰などの素材の確認、ファサードの外壁を対象とする NCS 色票による色彩把握を行い、調査結果をもとに散布図や GIS (Geographic Information System) を用いて視覚的に表現し把握を行うと同時に、CAD/CG により 3 次元モデル化し、形態・素材・色彩の変遷を明確に表現するとともに、分析結果をもとに調和を考えた提案のシミュレーションを行っている。

3. 対象地の選定

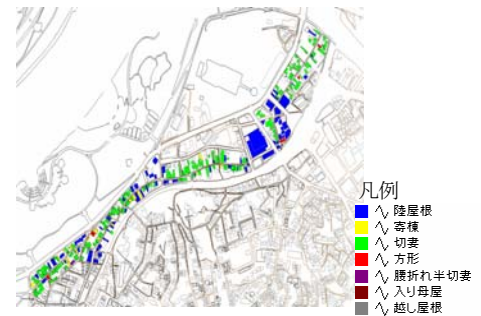
本研究では、枚方宿地区の景観保全地区に指定されている堤町、三矢町、岡本町、新町一丁目の4町を対象地として選定としている(図-1)。東海道 57 次 56 番目の宿場町という歴史的背景、先行研究によるさまざまなデータの蓄積があり多様な活用ができるためである。枚方宿地区では、1985 年には 57 軒あった町家が 2001 年には 27 軒まで数を減らしているが、この年には街並み環境整備事業が開始され伝統的建造物と現代の建造物と調和が考えられた活動が始まった。1985 年から 2001 年にかけての街並みの変遷と 2001 年から現在までの街並みの変遷を対比して把握できると考えた。



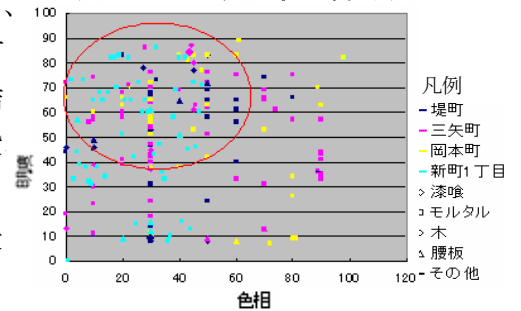
図-1 対象地

4. 形態・素材・色彩による現状把握と分析

まず、2007 年現時点における街路景観の現状把握を行った。屋根形状、格子形状・素材、ファサードの構成要素である外壁、屋根、格子（窓）、扉の色彩を調査し分析を行った。屋根形状や格子形状の分布を GIS 上（図－2）で、色彩における分析に加え素材を取り込んだ結果を町別など散布図（図－3）で表現し、地域の特徴や現存する町家 25 軒の周辺における問題点を把握した。



図－2 屋根形状の分布図



図－3 町別による外壁素材散布図

屋根形状の特徴として全体的には、一般的な切妻屋根を持つ住宅が多く、枚方駅付近にはビルやマンションが多いため陸屋根が多い。外壁は、新町一丁目にはモルタルが多く、色彩は R-Y に集中し高明度・低彩度という結果で比較的に明るい印象を与える。三矢町では、一般住宅以外に商業施設マンションが多いため色彩に全体的な統一感が見られない結果となった。しかし、25 軒の町家周辺では彩度、明度の差が極端であるという点も見受けられた。

5. 町家の変遷

1985 年から現在までの枚方宿全体の街並みと町家周辺の変遷把握を行った。町家の用途が住宅から駐車場へと変わり、また町家が壊され一般住宅へと建て変わったもの、格子が細目格子から木返格子へと部分的に変化したものなどが見られた。変遷を見ていくと、2001 年までは急激に減少していた町家の数がその後、現在に至るまで維持され、町家周辺の家も格子窓などを含んだ建造物に変化しているということが分かった。そこで変遷を視覚的に表現するために、3 次元モデルで表現しアニメーションを行った（図－4）。



図－4 鍵屋周辺の変遷

6. 調和した街づくりへの提案

現状把握と分析を行った結果、問題点が浮上した箇所の提案を行っている。提案を行う箇所としては、鍵屋などの歴史的建造物が比較的多い堤町と保全地区に指定されながらも歴史的雰囲気が見られない岡本町の 2 箇所をケース・スタディの対象とする。堤町は、住宅地が多く鍵屋もあるため比較的町家の雰囲気を漂わせているが、①のような色彩の統一・連続性がない瓦屋根の箇所、②のような町家と隣の建物との外壁の彩度や明度の差が激しく、屋根や扉の素材、色彩に統一感が見られなかった箇所もあった（図－5）。そこで、屋根の瓦の色彩も周囲と調和させ明度を上げ、外壁においては彩度を下げた。また、アルミ製の扉をアルミ製の格子戸に変化させることで、この周辺に統一・連続性が持てるようにした（図－6）。素材の統一性はなくとも、色彩や形態で統一的な要素を加えることで補うことができたと考える。

今後は、さまざまな地区の街路景観に対し形態・素材・色彩といった観点から見た統一性・連続性のある街造りの提案を行っていきたい。



図－5 修景前



図－6 修景後

【参考文献】 枚方市教育委員会：枚方市建造物調査報告書 旧枚方宿の町家 1987